

島のむんがたり

暮らしのなかの戦争

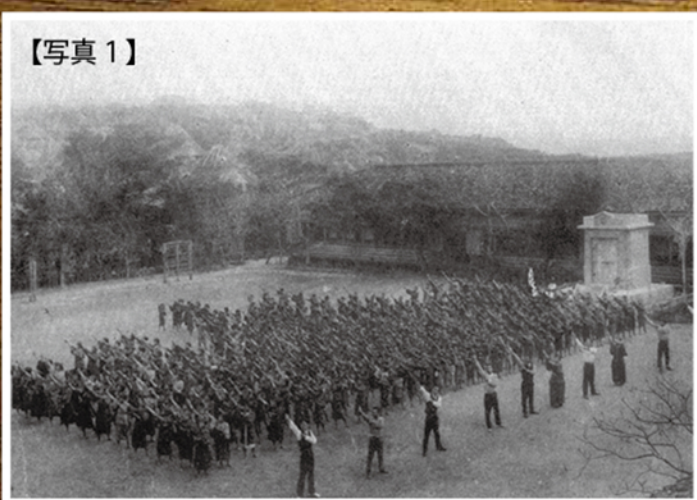
戦後80年

アジア太平洋戦争が終結して今年で80年。直接の「戦場」を体験した方々が少なくなる中、「戦争の記憶」をどのように継承していくのか、あらためて問われる機会となっています。

特集は、軍事史を中心に語られてきました。本企画展ではそれを踏まえつつも、視点を変え、当時の暮らしのなかに戦争がどのように現れたか？という問いを立てました。

われんきやと戦争

戦争をどう捉えるか
8月下旬から約1か月、町誌編さん室では企画展「暮らしのなかの戦争」を開催しました。これまでの徳之島における戦争

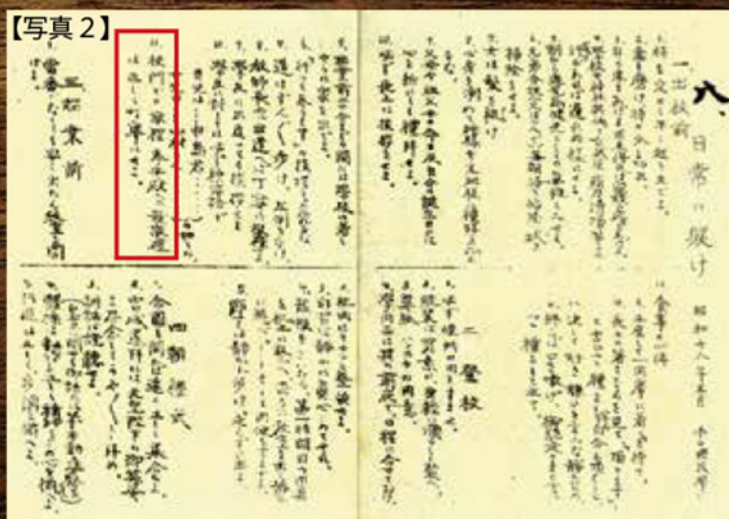


【写真1】

平成30年度から始まった町誌編さん事業では、各小中学校が所蔵する歴史的資料の調査をさせていただきました。そのなかに、戦前・戦中の学校の様子を撮影した貴重な写真も確認できました。【写真1】は、昭和6年（1931年）の花徳小学校の様子です。現在の学校校庭には見られないものとして、「奉安殿」があります。奉安殿には、「御真影」と呼ばれた天皇皇后の肖像写真や教育勅語（国民教育の基本方針を天皇のお言葉として示したもの）謄本が収められていました。

【写真2】は、昭和18年に記された手々国民学校の「日常の躰」（部分）です。この内容の（赤枠部分）にあるように、子どもたち

【写真2】



には奉安殿に「最敬礼」することが求められていました。日常を意識的にとらえることは思いのほか難しく、学校に配された奉安殿などの「装置」は、子どもたちの身体を有事に備えさせていく、そのような役割をもったのではないのでしょうか。一方、子どもたち自身はどのような思いをもっていたのか、その「声」を聴きとることが次の課題です。

（町誌編さん室 竹原祐樹）